

日本におけるキリスト教の歩み

その4 浦上四番崩れ&信教の自由へ・2

1867年徳川慶喜が大政奉還
明治新政府樹立

徳川幕府が倒れ明治維新となった。しかし、国家神道を主導する維新政治家は、キリシタンに対して徳川幕府の方針を踏襲。

戊辰戦争 1868年

幕末頃から維新にかけて、捕縛され投獄された浦上の潜伏キリシタンの弾圧は、四度に及んだ。1790年石仏建立の拒否で「一番崩れ」、1842年密告で「二番崩れ」。1856年も密告で「三番崩れ」この時、大勢の捕縛者は拷問で殉教した。それから11年目の1867年5月、棄教を拒否した浦上の信者高木仙右衛門はじめ中心的存在のキリシタンたちが捕縛され、津和野に流罪となった。これが「浦上四番崩れ」である。その後も迫害は続き、3,414人のキリシタンが、鹿児島、長州萩、津和野、広島、福山、和歌山、尾張、金沢など21藩にも及ぶ地域へ流配された。流配されたキリシタンの664人の方は、故郷に戻ることなく殉教した。（「旅」の話：浦上教会出版著）

1790年-1873年浦上で再度始まった迫害、流刑&殉教

彼らが「旅」と呼ぶ流罪は、1873年迄の五年に及んだ。流罪の地に捧げた彼らの命、信仰の証は現在も流配された地の墓に残されている。維新政府による迫害は、浦上だけで終わらなかった。三ツ山、五島の水の浦、楠原、久賀島等でも200人以上のキリシタンが迫害、投獄され殉教した。

1854年・和親条約、1858年・修好通商条約締結

1873年、カトリックとプロテスタントの宣教師たちは、フランス、アメリカの領事館にキリシタン迫害を廃めさせ、解放させる為に領事から新政府へ要求したが、受諾されなかった。しかし、大使として欧州に赴いた岩倉具視から、使節団の目的達成の為には、キリシタン迫害を早急に止める必要があると訴えた。そこで新政府は、受け容れた。同年2月遂に高札撤去、牢獄からの解放、信仰の自由こそ無いが公に信仰者として生活できる様になった。キリシタンたちの払った犠牲は教会の栄光の証となった。

信徒発見から潜伏していたキリシタン全員が、教会に戻ることはなかった。潜伏キリシタンは、長崎の三ツ山はじめ外海、長崎半島、黒崎、平戸、生月、五島列島の島々に、また天草や筑後の太刀洗にも集落を持っていた。当時宣教師らと連絡して公にカトリック信者となった人は、15,000人。しかし他の14,000以上の人々は、弾圧時代と同様密かに信仰生活を続けていた。なぜ戻らなかったのか。そこには複雑な要因が観られる。隠れキリシタンと言われる人々は、主に3つに区分される。①長崎と外海、②平戸と生月③五島列島（外海から移住）それぞれの地域のキリシタンには、信仰の守護神なるものを持つ。しかし、何故彼らは今日に至るまで隠れキリシタンでいるのか。①未だ迫害はある②これまでの役職を失う③彼らとの最初の接触の仕方に躓いた。その他、諸問題から今も残っている。

開国後、日本の教会で活躍したのはパリ外国宣教会の宣教師たちであった。プチジャン神父は信徒発見の翌年1866年司教に任命。迫害を受ける信者のために奔走、教会では司牧、教理、祈り本の製作。補佐にド・ロ神父もいた。1876年二つの代牧区に分かれ南を大阪に司教座プチジャン司教、北を横浜オズォーフ司教が担当。南補佐司教にロカイン神父、長崎を担当。1882年12月深堀、有安、高木の日本人3名が叙階。2年後、長崎でプチジャン司教が帰天。後継クーザン司教は、南を更に二つの代区に分けた。東京も司教座。名古屋から函館の北代区は14の代区に分れた。